2021 年 1 月 30 日

2020 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

母体血を用いた出生前遺伝学的検査（NIPT）受検における妊婦やパートナーの意思決定の関連要因：文献レビュー

Factors Associated with Decision-Making in Non-Invasive Prenatal Genetic Testing for Pregnant Women and Their Partners: A Narrative Review

19MN016
春藤 望

要旨

「目的」

NIPT 受検を考慮している妊婦やパートナーの意思決定における関連要因を明らかにする。

「方法」

電子データベースである医学中央雑誌 Web 版 Ver.5、PubMed、The Cochrane Library、CINAHL、PsycINFO、Embase を用いて、各データベースの収録開始年から 2020 年 04 月 27 日までに収録された研究論文を網羅的に探索し、対象文献を抽出した。また、抽出された文献の参考引用文献一覧からハンドサーチを行い、最終の対象文献を選定した。

「結果」

24 件の文献が研究対象として選定された。対象文献は全て英語で書かれたものであり、出版年は 2013 年から 2020 年であった。研究デザインは量的研究 12 件、質的研究 7 件、混合研究 5 件であり、研究の実施国は、カナダ、イギリス、オランダ、アメリカ合衆国、中華人民共和国、日本、オーストラリア連邦、デンマーク王国、フィンランド共和国であった。これらのうち、NIPT 受検者のみを対象とした文献は 4 件認め、他は NIPT 以外の出生前検査受検者や受検しない選択をした者も対象に含まれていた。また、妊婦(過去に妊娠を経験した女性も含む)のみを対象とした文献は 18 件、妊婦とパートナーを対象とした文献は 4 件、妊婦と医療従事者を対象とした文献は 1 件、妊婦とパートナーと医療従事者を対象とした文献は 1 件であった。NIPT 受検を考慮している妊婦やパートナーの意思決定における関連要因は、【NIPT の対象疾患となる児を妊娠している確率】、【得られる情報への思いおよびその活用】、【パートナーからの影響およびカップルの関係性】、【パートナー以外の家族または第三者からの影響】、【妊婦やパートナーの特性】、【検査にまつわる感情】、【NIPT 検査そのものがもたらす特性】、【社会からの圧力】という 8 つのカテゴリに分類された。また、NIPT 受検結果が陽性の場合に妊婦やパートナーがとる行動は、【侵襲的検査を経て妊娠継続】、【侵襲的検査を経て人工妊娠中絶を選択】、【侵襲的検査を受けずに妊娠継続】の 3 パターンに分かれた。NIPT を受検しない選択をした後の行動について記載されている文献はなかった。

「結論」

他の出生前検査にはない NIPT 受検における妊婦やパートナーの意思決定の関連要因は、NIPT が確定的検査ではないが、妊娠初期から実施可能で精度が高く非侵襲的である点、さらに個人の価値観に委ねられている NIPT にかかる費用への考え方にある点が考えられた。妊婦やパートナーの NIPT 受検における意思決定支援において、看護職を始めとする医療従事者は、自身の言動が妊婦やパートナーの意思決定を左右することを配慮し、中立的な立場からの適切な情報提供を行うことが求められる。